

## 中高生を対象とした生涯学習志向性尺度の作成とその実践的利用

### Development of a Lifelong Learning intentionality Scale for Junior/Senior High School Students and Its Practical Use

瀧井 夏<sup>\*1</sup>, 田和辻 可昌<sup>\*2</sup> 松居 辰則<sup>\*2</sup>  
 Natsu TAKII<sup>\*1</sup>, Yoshimasa TAWATSUJI<sup>\*2</sup>, Tatsunori MATSUI<sup>\*2</sup>  
<sup>\*1</sup> 早稲田大学人間科学部人間環境科学科  
 School of Human Sciences, Waseda University  
<sup>\*2</sup> 早稲田大学人間科学学術院  
 Faculty of Human Sciences, Waseda University  
 Email: natsu.coco3108@fuji.waseda.jp

**あらまし:** 本研究では、中高生が現段階で人生を通じて学び続けることに対してどのような意識をもって  
 いるかを計測する生涯学習志向性尺度の作成を行った。また、2479名の対象として、尺度得点と勉強時  
 間や教育方針の関連性を検討した。その結果、勉強時間や教育方針と、生涯学習に対する意識には相関が  
 あることが示唆された。

**キーワード:** 学習意欲, 生涯学習, 中高生, 教育方針

#### 1. はじめに

教育・学習において、学習者の意欲の維持は恒常的な課題である。清水・山口らは、中学生の英語学習において、体験型学習であるイメージ教育を受けている生徒は、動機づけの変化がほとんど起こらないことを明らかにした<sup>(1)</sup>。また、浅野は青年期の学習動機がその後の生涯学習に影響していることを述べている<sup>(2)</sup>。

そこで本研究では、中高生を対象に、人生において学び続ける意義をどの程度理解しているかを計測する「生涯学習志向性尺度」を作成した。さらに尺度得点と勉強時間や教育方針との関連性を明らかにすることで、生涯学習志向性尺度がどのように利用できるかを検討した。

#### 2. 方法

ジョン・ケラーのARCSモデル<sup>(3)</sup>を参考に、学習者が学習することの意義や生涯学習の必要性を認識しているかを測定する質問項目を作成した<sup>(3)</sup>。さらに現職の教員や塾講師、学習塾社長との討議を行い、質問項目を追加・検討した。最終的な質問項目は、学年・平日勉強時間・休日勉強時間・5段階質問98項目、記述式質問5項目で構成された。作成したアンケートを私立中学校・高等学校の生徒を対象に実施し、1699の有効回答を得た。中学生と高校生で、因子分析の結果に差が見られたことから、中学生と高校生に分けて尺度を構成した。累積説明率や質問作成時の予想因子数、質問項目の一貫性から、因子数を高校生9因子、中学生8因子構造が妥当であると考えられた。そこで因子数を仮定して98項目に対して最尤法・プロマックス回転による因子分析を行った。

さらに各学校の教育カリキュラムと、尺度因子との関連性を学習塾に通う中高生を一般的な学習者と

して、比較をすることで教育方針による生涯学習志向性尺度の変化の違いを明らかにした。また、尺度得点に応じて高群、中群、低群に分類し、学習時間と尺度得点の関連性を検討した。

#### 3. 結果と考察

##### 3.1 因子分析

欠損値は平均値で補完し、データを標準化した。プロマックス回転で因子負荷量の低かった項目を削除した。

その結果、中学生の生涯学習志向性尺度は「向上心因子」、「学習志向因子」、「自己肯定感因子」、「実技科目肯定因子」、「実技科目有益性因子」、「他者評価関心因子」、「学習有益性因子」、「未来志向因子」の8因子から構成され、累積説明率は37.5%であった。

高校生は、「向上心因子」、「自己肯定感因子」、「積極的学習因子」、「実技科目関心因子」、「他者評価関心因子」、「理数科目関心因子」、「未来志向因子」、「熱中因子」、「情報探索因子」の9因子から構成され、9因子での累積説明率は42.5%であった。次に $\alpha$ 係数を用いて各下位尺度の内部一貫性を検討したところ、十分な内部一貫性を示した。

##### 3.2 S高校の特徴

S高校に通学する学習者130名を対象にアンケートを実施した。内訳は1年生39名、2年生45名、3年生46名であった。

各因子の学年ごとの因子得点をレーダーチャートに示す(図1)。学年が進むにつれて、理数科目関心因子が向上している。この学校では、「部活で「理化」や「天文気象」、「生物」など、理数科目に結びついた部活動が存在しており、理数科目に関心のある学生が、さらに興味を深めることのできる環境が整っていることが、関心を助長していると考えられる。

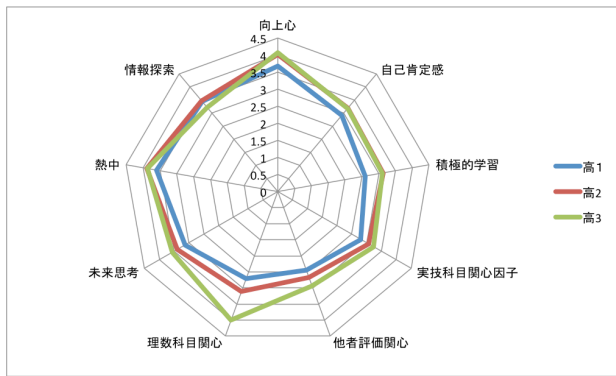


図1：S高校レーダーチャート

### 3.3 K高校の特徴

S高校に通学する学習者124名を対象にアンケートを実施した。1年生47名、2年生37名、3年生40名の有効回答を得た。

学習塾に通う高校生を一般的な学習者として、私立K高等学校に通う高校生と比較した(図2)。一般的な高校生に比べて、K高校に通う高校生は未来志向因子が3年間を通じて高い水準にあった。この学校は、アクティブラーニングを取り入れており、思考力や表現力を高める教育方針が、学習者に将来を考えさせるきっかけとなっている可能性がある。

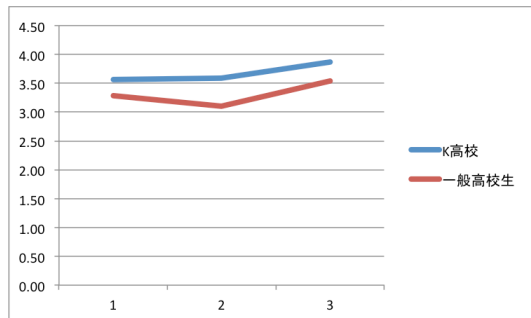


図2：未来志向因子の変化

### 3.4 尺度得点と学習時間

学習者を尺度得点に応じて「低群」「中群」「高群」に分類し、各群の平均値を算出した。さらに生涯学習志向性の程度における勉強時間の影響を分析するために、分散分析を行った。その結果、生涯学習志向性尺度と勉強時間は0.1%水準で有意であった( $F(2,459)=8.718, p<.001$ )。Turkey bを用いた多重比較によれば、「中群」と「高群」、「低群」と「高群」の間に有意差があり、生涯学習志向性尺度が高いと勉強時間が長いことが示された(図3)。

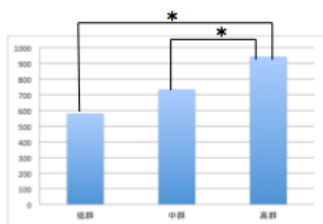


図3：各群平均値

### 3.5 記述式質問の分析結果

あなたが日常生活で「算数って面白い」と思った瞬間を教えてください』という記述質問に対する回答を尺度得点に応じて「低群」「高群」に分類し、テキストマイニングを行った。その結果を特徴マップに表した(図4)。単語が左寄りになっているほど「低群」により多く現れることを、右寄りになっているほど「高群」により多く現れることを意味している。また、単語が上寄りになっているほどこの文書で特徴的な単語であることを、下寄りになっているほどどのような種類の文書にも出現するような一般的な単語であることを意味している。図を見ると、低群に「無い」という単語が大きく偏っている。尺度得点が低い学習者は、算数に対するおもしろさを見出せていない傾向があるものと考えられる。一方で、高群側には「買い物」という単語があり、身近な単語と算数を結びつけて考えていることが分かる。

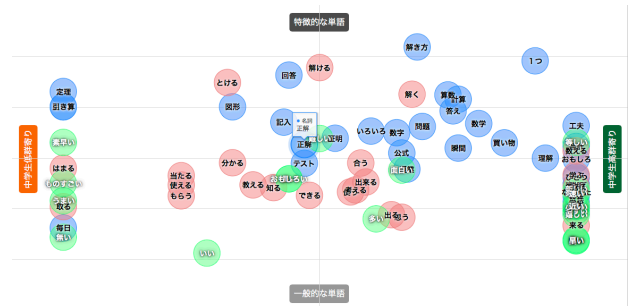


図4:記述式質問特徴語マップ

### 4. まとめと今後の課題

本研究では、中高生を対象とした生涯学習志向性尺度を作成し、尺度と教育カリキュラムや勉強時間の関係性を検討した。その結果、尺度得点と学習時間の間に有意な関連性が見られた。しかし、学習時間が伸びると学習に対する意欲が高まるのか、学習に対する意欲が高まると学習時間が伸びるのか、その因果関係は不明である。

今後は、尺度得点と学習時間がどのような因果関係をもっているのかを明らかにするとともに、どのような教育が生涯学習志向性の向上につながるかをさらに詳しく研究していく必要がある。

#### 参考文献

- (1) 清水真紀,山口陽弘: “中学生の英語学習に対する動機づけはどのように変化するか:英語イマージョン教育を受ける中学生と公立中学校の生徒を比較して”, 群馬大学教育実践研究(33), pp.209-206, (2016)
- (2) 浅野 志津子: “学習動機が生涯学習参加に及ぼす影響とその過程;放送大学学生と一般大学学生を対象とした調査から”, 教育心理学研究, 50,pp121-151 (2002)
- (3) ジョン・ケラー著,鈴木克明(監訳): “学習意欲をデザインする;ARCS モデルによるインストラクショナルデザイン”, 北大路書房, (2010)